

深夜の臭い出会い？（加筆修正前）

俺——早坂^{はやさか}レイジは夜が好きだ。

昼間と違って静かだし、何より視界に映る人の数が圧倒的に少ない。

そのため、俺は3日に1度は深夜の散歩に出掛ける。

といっても、自宅から歩いて10分ほどの場所にあるコンビニまで行き、ちょっとした食べ物や飲み物を買って帰るだけだが。

今夜もいつものようにコンビニで飲み物を買って家路に就く。

昼間は長袖だと汗ばむようになってきたが、夜風は涼しく心地いい。

（このまま夜が明けなければいいのに・・・）

たまに思う事だが、現実には不可能だろう。

人間は太陽の下でしか生きられないようにできているのだから。

そんな下らない事を考えているうちに、いつの間にか自宅とコンビニの中間地点である児童公園に差し掛かった。

この児童公園は下手な学校のグラウンドより広く、平日でも子どもからお年寄りまで様々な人たちの姿が見受けられる。

だが、それは昼間の話だ。

もうすぐ午前1時という現在、公園に俺以外の者の姿は——

「ん？」

ふと視界の端に動くものがあった。

視線をシフトしていくと、それは紛れもなく人間だった。

背を向けているので顔はわからないが、おそらく俺と同年代の少女だろう。

銀色の髪をショートカットにし、上はパーカー、下はショートパンツを穿いている。

（こんな時間に何してるんだ？）

俺が首を傾げていると、銀髪の少女は俺に背を向けたまま、目の前にあるジャングルに上り始めた。

ジャングルジムは高さ2mほどで、頂上には直径50cmほどの円盤が張られている。

最上部に到達した銀髪の少女は円盤の上に立つと、両膝に手を置いて尻を後ろに突き出した。

直後、

ブボボボボボボオオオ〜〜ツツ！！

爆音が周囲に響き割った。

音源は銀髪の少女の尻。

「っ!？」

少し遅れて強烈な硫黄臭が俺の鼻まで漂ってくる。

もう間違いないだろう。

今の爆音の正体は、彼女のオナラだ。

ブウウウウウウウウウウ〜〜ツツ！！

銀髪の少女は俺の存在に気付いた様子もなく、2発目のオナラを放つ。

(本当に何してるんだ、あいつ?)

「んっ！」

ふいに銀髪の少女が初めて声を漏らした。

それを反映してか、

ブブブブブブブウウウ〜〜〜ツツツ！！！！

先の2発以上に大音量のオナラが彼女の尻から放たれた。

「ぐっ!？」

これまで以上に強烈になった悪臭においに、思わず苦悶の声を漏らしてしまう。

結果として、

「・・・」

俺の存在に気付いた少女が前屈姿勢をやめ、俺の方に向き直る。

そこでようやく銀髪の少女の顔を見る事ができた。

退屈そうな表情を浮かべる整った顔は、ややボーイッシュな印象を印象を受ける。

肌は雪のように白く、切れ長の瞳は瑠璃色に輝いている。

身体のラインはスレンダーだが、胸や尻には女性的な膨らみがあった。

「[・・・]」

無言で見詰め合っていたのは、どのぐらいの時間だっただろうか。

数秒だった気もするし、数分だった気もする。

先に動いたのは、相手の方だった。

無言でジャングルジムを降りると、スタスタと俺の前へやってくる。

俺が対応に困っていると、

「ゴメンなさい」

彼女の口から出たのは謝罪の言葉だった。

「臭かったですよ？私のオナラ、強烈だから」

「あ、ああ、そうだな」

ジャングルジムから俺のいた場所まで漂ってきたのだから、その悪臭においは相当なものだろう。

「それじゃあ、私はこれで」

そう言うと、銀髪の少女が俺に背を向けて歩き出す。

「待てよ」

どうして呼び止めたのかは、俺自身にもわからない。

「何？」

だが、銀髪の少女は足を止め、再び俺の方に向き直った。

「えっと・・・口止めとかしなくていいのか？」

呼び止めてしまった手前、無言という訳にも行かないだろう。

完全な思い付きで問い掛ける。

「必要ないわ」

「言い触らされてもいいのか？」

「逆に訊くけど、『深夜の公園で、女の子がジャングルジムに上ってオナラしてた』と言われて、あなたは信じる？」

「・・・そういう事か」

彼女の言う通りだ。

俺が聞き手なら、間違いなく信じない。

それだけ先程の光景は現実味のないものだったといえる。

そして、そんな雰囲気にも俺も毒されていたのだろう。

「少し話さないか？」

普段の俺からは想像もできない言葉が出た。

「それって、ナンバ？」

「どう取るかはそっちの自由だ」

銀髪の少女は少し考えるような仕草をすると、

「タダで？」

ほんの少し口角を持ち上げ、そう問い掛けてきた。

「ジュース1本でどうだ？」

そう言って、俺は持っていたコンビニ袋を持ち上げてみせる。

全くの偶然だが、今夜はジュースを2本買ってあったのだ。

「コーラはある？」

「悪いが、炭酸は苦手なんだ」

「そう。まあいいわ。それで手を打ちましょう」

「ありがとう」

こんな風に、俺たちは出会った。

*

俺たちは備え付けのベンチに並んで座った。

「先に自己紹介しておいた方がいいな。俺は早坂レイジ、宝陽学園の2年生だ。お前は？」

「^{あしだ}葦田アスナ。^{まようや}経谷学園の2年生よ」

経谷学園。

此処からだ、電車で3駅ほど向こうにある学校だ。

「自己紹介が済んだところで、本題に入るか」

「ストレス解消よ」

「まだ何も言ってないんだが？」

「私がジャングルジムの上でオナラしてた理由、訊きたかったんでしょ？」

「・・・話が早くて助かる」

「ほら、誰もいない場所で思い切り叫ぶと、結構すっきりするでしょ？私の場合、それが声じゃなくてオナラなの」

「その例えはあってるのか？」

この公園は南北に細長く、夜はほぼ無人になる。

また、東側が夜は無人になる小学校で、西側は高い木が並んでいて住宅地から目隠しになっている。

誰もいないのはそうだが、叫ぶのとオナラは同じなのだろうか？

「別に間違っただけじゃないでしょ。さてと・・・」

説明を終えたところで、アスナが飲みかけのペットボトルを手に立ち上がる。

「もう帰るのか？」

「ううん、残りのオナラを出してすっきりしに行くのよ」

アスナが空いている方の手で腹を擦りながら応じる。

「あれだけ出したのに、まだ出るのか？」

「まだ2割も出してないわよ」

「あれで2割・・・？」

いったいこいつの腸内（おなか）には、どれだけのオナラが溜め込まれているのだろうか。

「じゃあ、もう行くわね。ジュース、ありがとう」

感謝の言葉と共に、アスナが別れを告げる。

しかし、

「何でついてくるの？」

何故か俺の足は背を向けて歩き出した彼女の後を追っていた。

「上手く言えないが、ちょっとした好奇心だな」

「臭いって文句は聞かないわよ」

そう言うと、アスナは俺の返事を待たずに歩き出す。

ジャングルジムを攻略した(?)彼女が続いて向かったのは、公園の遊具の定番である滑り台だった。

全体が青色に塗られた、ごく普通の滑り台。

アスナは両手を手摺りに置き、1段ずつジャンプしながら階段を上っていく。

しかも、ただ上るだけではなく、

ブウウッ！！ブポォッ！！ブバスッ！！

着地するたびに、短いオナラを1発ずつ放っている。

そして、階段を上り切ったところで、

ブブブウブブブブブブウ~~~~ツツツ！！！！

大音量のオナラを周囲に響き渡らせる。

「ぐっ!？」

程なくして、強烈な悪臭においが下にいる俺の所まで漂ってきた。

「だから臭いって言ったでしょ。文句は聞かないわよ」

「わかってー」

「滑るわね」

俺の返事に被せるように言って、アスナが滑り台を滑り始めた。

一見、普通に滑っているが、よく見ると身体をやや斜めに傾けている。

その理由は言うまでもないだろう。

ぶむうううううううう~~~~っっっ！！！！

滑りながらオナラを出すためだ。

ブオオッ！！！！

滑りきったところで、アスナは駄目押しのようにオナラをしながら立ち上がる。

「ふう」

そのまま大きく息を吐くと、俺の存在を無視して歩き出す。

いや、この表現は正しくないか。

俺の存在を無視しているのではなく、単に殆ど興味がないのだろう。

彼女の姿を見ていると、何となくそんな気がしてくる。

それから彼女は公園の遊具を巡りながら、次々とオナラを放っていった。

ブブブウウウウウウウ〜〜〜ツツツ！！！！

例えば、ブランコを漕ぎながら。

ブランコを大きく引き戻した後、前で漕ぎ出すタイミングでオナラを放つ。

ブビィッ！！プオオッ！！ブバスッ！！

例えば、1人でシーソーを上下させながら。

接地する瞬間とシーソーが持ち上がった瞬間に、それぞれ1発ずつオナラを出していく。

ブボボボボボボボボオ〜〜〜ツツツ！！！！

砂場でもその場で回転しながらオナラを撒き散らす。

無論、それがオナラである以上、出るのは音だけではない。

「ぐっ！？」

既に周囲は濃密な硫黄臭に染め上げられている。

この公園のような立地条件でなければ、ちょっとした異臭騒ぎになっていたかもしれない。

ブオオオオオオオオオ〜〜〜〜〜ンツツツ！！！！

すべての遊具を回ったところで、フィナーレを告げるような特大のオナラが公園に響き渡

る。

「ぐはっ!？」

その強烈な硫黄臭に苦悶の声を上げたところで、

「早坂レイジ、だっけ？」

アスナはようやく俺の存在に注意を向けた。

「そうだ」

「まだオナラ出せるけど、嗅いでみる、私のオナラ？」

問い掛けながら、アスナがショートパンツに包まれた尻を俺の方へ突き出してくる。

普通なら正気を疑うような彼女の問い掛けに、

「・・・」

俺は無言で首を縦に振った。

*

今の状況を端的に表すなら「超展開」といったところだろうか。

家を出る時はこんな事になるとは想像もできなかった。

現在、俺の目の前ではアスナがベンチに手を着き、こちらへ尻を突き出している。

どうやら本当にオナラを嗅がせてくれるつもりらしい。

しかし――

(どうすればいいんだ?)

このまま尻に顔を近付ければいいのだろうか?

それとも押し付けた方がいいのだろうか?

「どうしたの？」

一向に動こうとしない俺を見て、アスナが怪訝そうに問い掛けてくる。

「いや、その・・・」

返答に困っていると、

「あっ、そっか」

アスナが納得したように呟き、驚くべき行動に出た。

なんと穿いていたショートパンツを脱ぎ去ってしまったのだ。

それにより引き締まった桃のような尻に食い込むピンク色のTバックが露わになる。

「これでいいでしょ？」

アスナが再びこちらへ尻を突き出してきたので、

「あ、ああ・・・」

俺は頷いて彼女の尻に顔を近付けていく。

さすがに顔を押し付けるのは気が引けたので、手前 10 c m の位置までだ。

「いいぞ」

「よくないでしょ」

俺の言葉を否定して、アスナの方から顔に尻を押し付けてくる。

「むぐっ!？」

「んっ!」

ブブッブブブブブブブブウ〜〜〜ツツツ!!!

顔を柔らかい感触が包み込んだと思った直後、轟音と共に大量の臭気が俺の鼻へと流れ込んできた。

「むううううううっ!？」

予想以上に強烈な悪臭においに、思わず苦悶の声を上げて顔を離してしまう。

「ゴメン、思ったよりオナラが残ってたみたい」

「ごほっ、ごほっ、ごほっ・・・そ、そのようだな」

「もう1発、嗅ぐ?次は控えめにするから」

「・・・」

少し考えた末、俺は改めて彼女の尻に顔を押し付けた。

「行くわよ・・・んっ!」

ブシュウウウウウウウ・・・ツ。

2発目のオナラは風船が萎むような音だった。

本人も言った通り、確かに1発目より控えめになっている・・・音だけは。

「むぐううううううっ!？」

悪臭においは1発目にも引けを取らないレベルだ。

むしろ1発目より強烈になっている気さえする。

「お、音だけ控えてどうする・・・」

アスナの尻に顔を押し付けたまま抗議する。

2発のオナラを喰らったせいで、立ち上がる気力がないのだ。

「悪臭においも抑えたつもりだったんだけど・・・んっ!」

ブボオオッ！！！！！！

怪訝そうに言いながら、アスナが3発目のオナラを放つ。

今度は爆音だが、量は抑えられてる。

だが、

「ごはっ！？」

その分だけ悪臭が濃縮され、大型ダンプカーに撥ねられたような衝撃が襲ってくる。

傍から見たら、オナラの勢いで吹き飛ばされたように見えたかもしれない。

「これでどう？」

「ダ、ダメだ・・・」

視界がふらつくのを感じながら、首を左右に振る。

「も、もうやめにしよう・・・」

「最後に、もう1回だけチャンスくれない？」

そう言って、アスナはTバックショーツまで脱いでしまう。

露わになった染み1つない尻。

その中央に息づく桜色のアナルは俺を誘うようにヒクヒクしていた。

「これで最後だぞ」

そう告げて、俺はまた彼女の尻に顔を押し付けた。

ちょうど鼻の穴で彼女のアナルを塞ぐ格好だ。

(そういえば、チャンスって何だ?)

俺の脳裏に遅ればせながら湧いてきた疑問。

「んっ！」

ブブブツブオオオオオオオオオオ～～～ツツツ！！！！

その疑問は直後に放たれたオナラによって文字通り吹き飛ばされた。

悪臭、音、量・・・どれを取っても最凶レベルの1発が俺の嗅覚を蹂躪し、臭気が気管や

肺まで汚染していく。

「っっっっっ！？」

声にならない声を上げながら、最後の力を振り絞って彼女の尻から顔を離す。

「大丈夫？」

「こ、殺す気か・・・」

アスナに支えてもらいながら、ベンチに腰を下ろす。

「ゴメン。ちょっと力みすぎた。加減なんてした事ないから」

謝罪しながら、アスナはTバックショーツとホットパンツと穿き直す。

「できれば、もう少しすまなさそうな顔してくれないか？」

「・・・」

俺が問い掛けると、アスナが自分の顔をむにむにと弄り始めた。

どうやら表情を作るのが苦手らしい。

「ん？もうこんな時間か」

公園に設置された時計を見ると、既に草木も眠る時刻を過ぎていた。

「さすがにそろそろ帰った方がいいか」

「そうね」

俺の言葉に頷き、アスナが出入口の方へと歩き出す。

「明日も来るのか？」

去り行く背中に向かって、俺はそう尋ねた。

「気が向いたらね」

彼女は足を止め、首から上だけをこちらへ向けて応じる。

「あなたは？」

「俺も気が向いたらな」

「そう」

短く答え、今度こそアスナは振り返る事なく去っていった。

*

翌日、俺は昨日と同じ時間に、公園へとやってきた。

いつもと同じ静まり返った公園。

辺りを見回して見るが、アスナの姿は何処にもない。

「まあ、そうだろうな」

あいつは気が向いたら来ると言っていたが、俺という目撃者が現れた時点で此処へ来るとは思えない。

そんなリスクを負うほどバカでは――

「あなたも気が向いたみたいね」

「！」

ふいに後ろから聞こえた声に、俺はゆっくりと振り返る。

そこには、

「こんばんは」

アスナが昨日と同じ退屈そうな表情で佇んでいた。

終